

2021年6月20日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会

奏楽

前奏

招詞

フィリピの信徒への手紙 第2章10節-11節

讃美歌

讃美歌 21-17-1 (聖なる主の美しさと)

交読

詩編 第8篇 (p. 10)

祈祷

聖書

マルコによる福音書 第14章27~31節

(新約 p. 92)

出エジプト記 第13章17~22節 (旧約 p.115)

讃美歌

讃美歌 21-59-1 (この地を造られた)

説教

「先立ついのち」

今朝わたしたちに与えられております聖書箇所、ここはイエスさまが過越しの食事、主の晩餐を終えられた時のことです。この過越しの食事とは、旧約聖書の出エジプト記が伝えて

いるように、イスラエルの民がエジプトで、いのちの危険にさらされている彼らを、神さまが引き出してくださった救いの出来事を記念するお祝いの食事です。この過越しの夜には、死の力が次々と家を打つ時に、この過越しの子羊の血を塗っているイスラエルの民だけは、死から免れます。過越ししたというのは、いったい何が過ぎたのか。それは死の力、滅びの力が過越ししたということ。これは、キリストの甦りの命による救いの出来事の先取りとも言われます。ですからわたしたちも、その主イエスの晩餐を記念して、教会に集まると聖餐を受けて、主の食卓を囲む。これも「甦りのいのちの食卓」ですから、弟子たちがイエスさまと一緒に囲んだ食卓もまた、いのちの食卓で、甦りのいのちの食卓であったとも言えます。

イエスさまはそのようないのちの食卓を作り、そしてそこで賛美の歌を歌われたとあります。26節です。この時、いったいイエスさまと弟子たちは、どんな歌を歌ったのか。旧約聖書の中に詩編 150 篇がありますが、その中の第 115 篇から第

118 篇を歌ったと考えられます。これは過越しの食事の歌です。特に、食事が済んだ時に、こうした詩編を歌いました。今はどんなメロディーで歌われたのかはわかりませんが、一つ分かっていることは、皆で斉唱したというよりも、ひとりがこの詩編の短い言葉を唱えるたびに、他の人がハレルヤ、ハレルヤと歌って応えたようです。もちろんこの時、歌の導き手として、先に歌われたのは、イエスさまでしょう。

イエスさまは詩編を愛されました。いつも歌っておられたようですと言ってもいいだろうと思います。ですから、この時もまた暗唱して歌っておられる。わたしたちが覚えているのは、イエスさまが十字架の上であつてもなお詩編第 22 篇の最初の言葉、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」という言葉を、口になさつたということです。そうすると、最後まで、詩編の中にあつて、詩編と共にあつたイエスさまが、ここで弟子たちと一緒に詩編を歌って、その席からお立ちになつた。オリーブ山へ出かけた。いつも出かけられる、祈

りの場所であったと思いますから、行き慣れた道だったかもし
れません。ただこの時は夜です。もし晴れていたなら過越しのお
祭りは満月の時ですから、月が明るく輝いていたかもしれませ
ん。それにしても、夜道です。今のように舗装されているわけ
ではありません。つまずかないよう大きな石を避けて丘へ登り
ます。その時、イエスさまが言われました。「あなたがたは皆わ
たしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散って
しまう』と書いてあるからだ」。これはゼカリヤ書の預言の言葉
です。それをイエスさまが思い起しておられます。神さまが定
められた通りのことが、今ここに起こる。あなたがたは、わた
しにつまずく。実際に夜道につまずかないようにと、気を取ら
れていたかもしれない弟子たちです。そこでイエスさまが、自
分たちに語られた最後の言葉が、おそらくあなたがたはわたし
につまずくだろうではなく、はっきりとあなたがたは確かにわ
たしにつまずく、と言われたことを、その後、決して忘れるこ
とはなかったはずです。

どうして、つまずいてしまうのか。それは羊飼いが打たれるから。羊飼いであるイエスさまが打たれて殺されるからです。羊飼いがいなくなる。そうしたら、羊は散ってしまいます。ばらばらになります。その時が、もうすぐそこまで来ていると、言われます。ところが弟子たちは、その言葉を聞いて、なるほどと思ったわけではないようです。おそらく、イエスさまが先頭に立って歩いておられる。その傍らを弟子のペトロが、やはり一番近くを歩いていたと思います。それを聞いたペトロがすぐにこう言います。「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」。おそらくペトロはここで、他の人たちは、なるほど、あなたが言われるように弱虫で、愚かだから、あなたのことをまだよく分かっていないから、逃げ出すかもしれませんが、わたしは違います。そうペトロは言ったのです。

似たような意識を持つことは、わたしたちの中にもしばしばあるだろうと思います。教会の中で、それに似た響きの言

葉が聞こえてくることがあります。神さま、わたしは違います。わたしは、あなたのこと、イエスさまのことがよく分かっています。でも、他の人たちは、まだ分かっていません。キリストの十字架の意味、その深さをまだよく分かっていない人たちがいます。でも、わたしは分かっています。キリストの愛を知らない人、実践することができない人がいます。けれど、わたしは違います。実は、そう言い張るところで、自分だけは違おうと強調しながら、弟子たちの群れが散り始めてしまう。そのように、わたしたちが同じように犯す罪があります。そして、それがここで、ペトロによって明らかにされています。

ところが、イエスさまはそのペトロその人の弱さを見抜いておられる。「はっきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」。「今日、今夜」と言われているのは、ユダヤの暦では、陽が沈むと、もう新しい日が始まるからです。もう金曜日が始まっている。その日のうちに、「鶏が二度鳴く前に」。二度鳴く

というのは、当時の人たちの考え方によるものです。最初の鶏が鳴いて暁を告げて、その次の鶏の鳴き声で朝が明ける。今日のうちに、あなたはわたしを裏切る。三度わたしを知らないと言う。「三度」というのは「完全に」という意味です。

「わたしのことを知らない」と言う。これは、聖書の中ではとても大切な意味を持った言葉です。とても大事な言葉ですから、確認したいのですが、ルカによる福音書の第12章の8節です。「言っておくが、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を自分の仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の天使たちの前で知らないと言われる」。ここに出てくる「知らない」という言葉、この「知らない」とは、「言い表す」という言葉と確かに対比して語られています。「言い表す」と訳されている言葉は、「誰かと同じことを言う」という意味の言葉です。実はこれは「告白する」とも訳されています。同意を表す言葉です。イエスさまがおっしゃっ

た言葉に、言葉を合わせる時にも信仰の告白になります。皆が同じことを、声を揃えて言う時にも、信仰の告白になります。神さまがなさったことに同意を示し、それを認める時にも、信仰の告白になります。ここで「人の子」と呼ばれているのは、イエスさまご自身のことです。イエスさまは、わたしたちをご自身の仲間として招いてくださいました。仲間としてくださいました。食卓につかせてくださいました。そのことに同意して、ありがとうございます、その通りです、と言うのが信仰の告白です。わたしは、あなたに仲間にしていただいた者です。あの人もこの人も、皆仲間ですと、声を揃えて言うのが、信仰の告白です。そして、それを否定するのは、主イエスを知らないということであり、主イエスの仲間を無視することです。あの人たちのことは知らないということです。

そのような者を、わたしも知らないとしか言いようがないと、ここでは、イエスさまは言われました。ところが、その言葉を、ここでペトロが語った時に、イエスさまはそのままに

はしておられない。「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」。そんなペトロに向かって、先立つご自身の歩みをここで語られます。この言葉は、イエスさまが、すでに語られた言葉です。けれど、どうやらペトロの心には残っていないようです。皆が、つまりくということだけで、頭に血が上ってしまったのかもしれませんが。さらに、三度わたしのことを知らないと言うだろうと言われたのですから、ますます興奮してしまったのかもしれませんが。ペトロは力を込めて言い張ります。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」。この言葉からある人が、「まるでパウロみたいだ」と言いました。パウロのどこと似ているのか。パウロは、「わたしはキリストと共に死に、キリストと共に生きる」ということをいつも言っていた人だからです。たとえばローマの信徒への手紙第6章8節にこういう言葉を書きました。「わたしたちは、キリストと主に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」。5節にも似た表現をしています。「もし、わたしたちがキリストと一体になっ

てその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれる」。パウロとどこが似ているかと言えば、キリストと一緒に死ぬ、キリストと一体になって死ぬと、ここでペトロが言っているからです。けれど、ここでペトロが言っているのは、絶望の表現です。あなたが死んでしまうのなら、それで世の中が真っ暗になるなら、わたしだって死んだっていい、と言っている。しかも、実際には主イエスの深い絶望の死に耐えることはできなかった。

けれど、そのペトロの言葉に先立って、イエスさまがこう言われました。「しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」。イエスさまはここで甦りを語っておられる。詩編を歌いながら、甦りのいのちをすでに知っておられた。甦ってガリラヤへ行く。実際にこのマルコによる福音書は、イエスさまが甦られた朝、お墓を訪ねた婦人たちに向かって、墓の中にいた若者はこう言いました。「あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活な

さって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロにつげなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と」。

一つは時間的に、先に行くということです。甦りの日の朝、もうおられませんから。主イエスは先立っておられる。実際に、弟子たちは、この後、主イエスの復活を知りながら、なお失意を抱いて故郷に帰ってしまいます。弟子たちの集団解散です。もうやってられない、わたしたちの羊飼いはおられなくなつた、わたしたちの理想は潰れた。そう思ったら、元へ戻るだけです。そしてイエスさまと共にあつた日々は、思い出になるだけです。印象深かつたかもしれないけれど、もう自分たちを生かすものではない。かえって、絶望の色を濃くさせるだけの思い出になってしまう。そんな思いでガリラヤに帰つた時に、主イエスがそこにおられる。絶望の中に帰つたつもりであつたら、そこにイエスさまがおられる。主は、そのように先に

行ってくださいました。

そしてもう一つ、この「先立つ」という言葉を、イエスさまが、いつもわたしたちの先に立っているという意味が、強調されていると読むこともできます。たとえば、第10章32節。「一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは、先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは、再び12人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。『今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する』」。主イエスにとって、人々に侮辱されることもつらかったはずですが、弟子たちに見捨てられることもまた、つらかったと思います。ご自分の予告通りに、散って行く弟子たちの姿を見ながら、十字架に向かわれることは、とても厳しいことであったはずですが、そのよ

うな予告を、ここでしておられる時に、イエスさまは先頭に立って歩いておられ、この主イエスの先頭に立つ姿は、それに従う人々に、恐れと驚きを与えた。このイエスさまがエルサレムに向かって、ひと筋に歩まれると共に、十字架から甦りへと、またひと筋の道を歩み抜かれた。あなたがより先にガリラヤへ行っているからと、そうイエスさまが、言われた言葉を、弟子たちが後になって鮮やかに思い起した時、すでにエルサレムに上る時に、先頭に立たれたときのこのイエスさまのお姿を重ね合わせたと思います。もしかすると過越しの時のことから、イスラエルの出エジプトの物語を重ねて思い起したかもしれません。エジプトから脱出することができたイスラエルの民、そのイスラエルの民を導かれた神の導き方が、出エジプト記第13章に書かれています。近道があるのだけれども、その近道は厳しい。というのも、そこで戦わなければいけないかもしれないから。だから、その戦いで、イスラエルの民が挫けてしまふといけないから、もっと安全な道に導こうと神は言っておられる。しかもそこで、神は、明るいときには雲の柱を立て、

夜暗くなれば火の柱を見せて、イスラエルの民を導かれ、「わたしはあなたがたと共にいる」ということを、はっきりといつも聞かせて下さり、確かなものとしてくださった。教会も、出エジプトの民です。死を突き抜けて生きる、出エジプトの民です。

先週、先々週と二週続けてわたしたちは、わたしたちの群れの中から二人の姉妹を主の身許に、天に送りました。最後に、一緒に礼拝を守る時が与えられました。亡くなった者と一緒に礼拝を守るということ、これもまた、いずれここにいるわたしたちが天において共に礼拝を守る、その先取りです。死んでしまったら終わり、それぞれがばらばらに散らされるのではなく、生ける者にとっても先に天に召された者にとっても、わたしたちの羊飼である主イエスが、わたしたちを散らさずに導いてくださることを信じて生きることができるようになりました。だとすれば、主イエスについて行く道を退けるわけにはいきません。喜びがない、望みがないとは言っておられなく

なります。すべてに勝る豊かな祝福が、すでに、今ここにあるからです。お祈りいたします。

日曜日ごとに主イエス・キリストの甦りを祝います。互いに祝福し、生かされ守られて一週間を歩んだそれぞれが、ここに集まることができました。この礼拝に来たくても来ることの出来ない者もいます。けれど、それぞれのところで礼拝を守るわたしたちは、散らされているのではなく、あなたの身許にあって散っていた者がひとつに結ばれているとの喜びを知ります。どうかこの群れが、新しいいのちをあなたからいただき、復活の喜びを心に秘めてこの会堂を出て、新しい一週間の生活を始めることができますように。どうかあなたが常に共にいてくださり、必要なところで雲の柱、火の柱に気づかせてくださいますように。感謝と願いを主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

讃美歌 讃美歌 21-296-1 (いのちのいのちよ)

献金 讃美歌 21-65-2

報告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>